

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	江端 希之
論文題目	マダガスカル・イメリナ地方におけるドゥアニ信仰の生成と発展 —信仰の具象化に着目して—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、マダガスカル共和国の中央高原地帯イメリナ地方における「ドゥアニ」と呼ばれる聖地を中心とする信仰の生成と発展の総体を明らかにしたものである。各ドゥアニには様々な王霊や精霊が祀られ、祭祀対象を霊媒や参拝者に憑依させお告げを聞くといった実践が行なわれている。近年ドゥアニは、国内のみならず国外からも多くの巡礼者を集める。特にイメリナ地方では巡礼者の増加に伴い、立派な社殿や施設が建ち並び、ドゥアニの数そのものも増加しつつある。</p> <p>序章では、「信仰の具象化」という本研究の視座について、物質宗教研究やアクターネットワーク理論の観点から論じた。また、先行研究がドゥアニの宗教実践を崇拜対象ごとに別々のカルトとして扱ってきたことを指摘し、ドゥアニの宗教実践を「ドゥアニ信仰」としてその総体を捉える必要性を述べた。</p> <p>第I部では、イメリナ地方のドゥアニ信仰の特徴として、メリナ人の伝統的な諸観念と密接に関わっていることや(第1章)、個々人の創造性が反映されやすく信仰対象と信仰者の距離が近いという点が指摘された(第2章)。さらにドゥアニと他宗教との関係性について、伝統宗教と補完的な関係にあり、サカラヴァ地方のドゥアニ信仰と創造的な関係を結び、キリスト教が支配的な社会の中でその距離を測りながら存在している点が論じられた(第3章)。</p> <p>第II部では、イメリナ地方のドゥアニ信仰の生成の歴史が考察された。ドゥアニ信仰の源流である伝統宗教の諸要素は、メリナ王国時代に国家的伝統宗教として成立し、王家のキリスト教化に伴って崩壊した。しかし植民地期には、村落共同体の伝統宗教から分化した聖地崇拜が、憑依儀礼チュンバなどサカラヴァ起源の要素を受け入れ、ドゥアニ信仰として成立した。また、マダガスカル独立後はドゥアニが観光資源化し、国外からも巡礼が増加したことが論じられた(第4章)。続いて、イメリナ地方のドゥアニ信仰に大きな影響を与えるサカラヴァ地方においても、近年、イメリナ地方と共通する変化が表れていることを明らかにした(第5章)。また、憑依儀礼チュンバにおいて「更新と回帰」というイメージの循環が生じ、その中で個別の創造性が発露されながら、ドゥアニ信仰としての全体性が維持されていくことを論じた(第6章)。さらに、レユニオン、モーリシャス、コモロといった西インド洋の島々の民間信仰とマダガスカルの関係性を検討し、彼らがマダガスカルのドゥアニに巡礼に来る背景を考察した(第7章)。</p> <p>第III部では、イメリナ地方の主要ドゥアニを11か所取り上げ、民族を超えた祭祀対</p>			

象の「パンテオン」（神々の体系）が形成されつつあること、新たなドゥアニの建立、祭祀対象の図像化、社殿化が進行していることなどを明らかにした。とくに社殿化は、ドゥアニという場所と祭祀対象の間のイメージの相互作用の中で生じる現象であることを論じた（第8章）。続いて、マダガスカル人や外国人の霊媒に率いられた信徒集団の巡礼を検討し、ドゥアニ信仰の特徴である「個人化」と「選択の原則」による「自由さ」が、ドゥアニ信仰への社会的マイノリティの参加を促している可能性を指摘した。また、イスラームとドゥアニという異なる実践を同時に行なうインド系モーリシャス人ムスリムの霊媒が、「憑依霊を通じた越境」を実践する様子を論じた（第9章）。次に、定点観測的研究として、旧王都アンブヒマンガ近郊の聖地マンガベのドゥアニを検討した。そこでは社殿化や祭祀対象のパンテオンの統合化といった現象が生じており、その発展を支えてきたのは首都や国内外の遠隔地からやってきた「よそ者」だったことを明らかにした（第10章）。さらに、ドゥアニの祭祀と運営を司る職能者ピアンジュに注目し、異質なものを許容するピアンジュの姿勢が、多様な実践の受け皿としてドゥアニを機能させていることを論じた（第11章）。また、ドゥアニにおける権力関係を検討し、世俗の権力を源泉とするピアンジュと、霊的な権力を源泉とするサハベ（霊媒長）の両立と緊張の中にドゥアニが存立していることを論じた（第12章）。

終章では、祭祀対象のパンテオンの統合の結果、イメリナ地方のドゥアニ信仰が、ゆるやかな「多神教」的実体を形成しつつあることを論じた。また、信仰の具象化は、憑依実践を通じて発展していることを論じた。最後に、イメリナ地方のドゥアニ信仰とは、不可能性を飼い慣らす実践であるとの結論を述べた。